

【主題】新型コロナウイルスの授業実践

【副題】科学的なアプローチでコロナいじめを乗り越える

【学校・団体名】仙台市立台原小学校

【役職名・氏名】教諭 掛川 恵一

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい始めて、早 3 年が過ぎようとしている。最初は耳慣れなかった「新しい生活様式」なるものも今ではすっかり学校生活に定着しつつある。この実践は、2 年前の冬にあった新型コロナウイルスの第 3 波が全国的な広がりを見せると同時に、社会におけるいじめや差別が大きな広がりを見せたことに危機感を覚え、新型コロナウイルス感染症によるいじめ、差別を起こさないために、学校を上げて取り組んだ授業実践である。

2. 実践の経過

【令和 2 年度】

当初、学年主任として担当していた 4 年生 3 クラスでの実践を構想し、準備を進めていた。そして、その旨を校長に相談したところ、大事な取組だからぜひ、全校でできるように、保健安全部を通して組織として進めていくようにと助言を頂いた。それを受け、所属している保健安全部で提案、検討をして頂き、2 月の職員会議で提案することとなった。校長の支持もあり、全職員の了解を得て、年度末の忙しい中ではあったが、学年の実態、実情に沿って授業実践を進めて頂いた。

【令和 3 年度】

令和 2 年度は新型コロナウイルスのデルタ株が急速に感染拡大するに至り、冬休み明けの職員会議で、保健安全部として授業実践を進めるように提案した。内容は、前年に提案した授業プランを引き続き活用することに合わせて、長野県の諏訪中央病院の玉井道裕医師が作成した「新型コロナウイルス感染をのりこえるための説明書」を実践資料として紹介して実践を進めてもらった。

【令和 4 年度】

6 月の職員会議で、保健安全部としてこれまでの経緯と授業実践の意義を伝えて、学年を中心に授業プランを活用しながら実践を進めるように提案した。

3. 授業実践の概要

○ねらい

・宮城県もレベル 3 になり、新型コロナウイルスの感染

拡大が進む中、感染予防がなぜ大切なのか、ここまで明らかになった知見を基に、科学的な知識や対処法を子どもたちに理解してもらい、感染予防に努めてもらうこと。

・台原小でも子ども達やその保護者、教職員に感染者が出た場合にも学習を生かして、いじめや差別をせず、冷静に対応できるようにするため。

- ①新型コロナウイルスとは、どういうものか。
- ②新型コロナウイルスが持つ 3 つの顔。
- ③新型コロナウイルスによるいじめ・差別。

以上のねらいをもとに、学習内容の大枠を以下のように提示した。

留意事項としては、

- ・発達段階を考慮すること
- ・学年を中心に、準備期間を 1 週間、授業の実施時期を 2 週間と時期を決めて、何時間扱いにするかも含めて任せる。
- ・低学年・中学年・高学年用の授業プランを作成し、自由に活用してもらおう。授業プランは、パワーポイントで作成されており、ワークシートも作っていたので、教師の方で学習内容を押さえていけば、すぐにでも授業ができるように準備した。
- ・それ以外にも授業で使えるような動画、pdf などの資料も提示し、教材として自由に活用してもらえるようにした。
- ・学校からは取組に関するお便りを出し、保護者への実践への理解と啓蒙を同時に進めていくようにした。

職員会議で危機感と授業実践の必要性を共有して頂いたおかげで、どの学年も授業プランを中心に、実践を進めてくれた。

4. 授業プランについて

次に提案した授業プランについて説明したい。学習の大枠で提示したように、以下の 3 つの要素が入っている。1 つずつ説明をする。

- ① 新型コロナウイルスとは、どういうものか。

その名の通り、ウイルスに自体に焦点を当てて掘り

下げることが柱となっている。新型コロナウイルス感染症は、今までの風邪とどこが違って、どこが同じなのか、そして、急に始まった「新しい生活様式」の中で、強調されている、「三密」を避けることや「手洗い」と「マスクの着用」がなぜ必要なのか、その当時でも、することの重要性については、かなりアナウンスはされていたが、なぜすべきなのかについては、意外に子ども達は理解していないのではないかという問題意識を持っていた。そのような問題意識に応える授業プランを大和町立鶴巣小学校（当時）の矢部智江子先生がつくり、実践されていたので、①の授業プランは、大いに参考にさせて頂いた。また、当時、新型コロナウイルスに関する知見が十分ではないこともあり、学校毎にも休み時間の過ごし方や学習の進め方にかかなりの違いが見られた。それは、どの学校現場でも子ども達の命と、発達保障・学習保障を天秤にかけてどのようにして学校生活を作り上げていくのか、その狭間で試行錯誤をしていたと考えられるが、過剰に子ども達の生活に制限をかける極端なケースがニュースで取り上げられているのを見るにつけ、「正しく学んで、正しく恐れる」ことを子ども達たちだけではなく、教員にとっても必要だと考えていた。よって、この授業実践は、教師も子供と共に学びながら新型コロナウイルスの認識を深めていく学習となった。

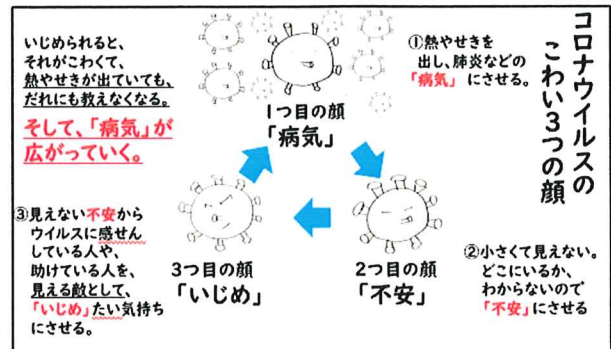
【子ども達の感想】

- ・飛沫が飛ぶのは2mぐらいだと聞いてびっくりしました。これからは、手洗い、うがい、消毒を徹底的にやっていきたいです。さわっただけでは、感染しないと聞いて少しだけ安心しました。
- ・ウイルスは1マイクロメートルで、マスクの小さい穴より小さいことが分かりました。接触感染と飛沫感染の仕組みが分かりました。だれかに広げないように気を付けます。
- ・ウイルスに油のまくがあって、消毒や石けんで20秒でOKということを知りました。つばが、2mぐらい飛ぶことを初めて知って、だから、ソーシャルディスタンスがあるんだなあと思いました。

②新型コロナウイルスが持つ三つの顔。

2つ目の授業プランの柱は、ウイルスが持っている「三つの顔」と「免疫システム」である。「三つの顔」については、感染症一般には常識として捉えられている事柄のようだが、日本赤十字が作成した動画を見て

初めて知り、非常に納得した。道徳的には、「いじめはだめ」ということがこれだけ社会的に認知されているにもかかわらず、社会における「いじめ・差別」がその当時横行していたのは、この「三つの顔」のメカニズムへのアプローチが足りないからだと考えた。



「三つの顔」とは、人間の生存欲求をベースに「病気」、「不安」「いじめ・差別」がつながっているということである。つまり、「病気」が、「不安」を生み、「不安」が、「見えないウイルス」ではなく、安易に身近に「見える人たち」を敵と見なして攻撃してしまうのが、感染症特有の「いじめ・差別」なのだ。小学校段階では、低・中学年に「生存欲求」を理解させるのは難しい部分もあるが、人間が持つ「心の働き」について理解することは、正しく恐れることに欠かせないものだ。同時に、ウイルス感染から治った友達の受け入れや自らが感染した後に、学校復帰に当たって欠かせないのが、「免疫システム」に対する理解である。後から述べる子ども達のアンケート結果にも関わるが、自らが感染して回復した後にも、友達に感染させる恐れや回復した友達からの感染する恐れを抱いている子ども達が多数いた。これは明らかにウイルスに対する無理解が生むものであり、「いじめ・差別」の元凶となっているものである。そして、これは正しい知識を得ること以外に乗り越えることができない壁である。この壁を越えるために必要な知識が、「免疫システム」である。

【子ども達の感想】

- ・今回は、体の中で免疫がコロナウイルスと戦ってくれていることがよく分かりました。また、「三つの顔」がつながると病気が広がっていくことも分かりました。これからは、感染してしまった人をいじめたりしないように気を付けていきたいです。
- ・体の中で、たくさん免疫があるので、少しだけ安心しました。コロナには、「三つの顔」があるので、恐ろしいなあと思いました。改めて、いじめはぜったいにしてはダメなことだと分かりました。

③新型コロナウイルスによるいじめ・差別

3つ目の授業プランの柱は、感染した人がどのような心的状況になるのか、こちらも日本赤十字社が発行した大人向けのパンフレットを参考にしながら小学生バージョンを考えた。そして、感染している人に掛けるべき言葉と言うべきではない言葉について、実際にワークシートに書き込みながら考えるというものだ。

では、ひとつひとつの気持ちに声をかけてあげましょう。まわりの人が応援してくれたら、きっと休んでいる友達や自分も、安心できるのではないのでしょうか。

①自由に動けない。イライラする。

②まわりの人とうつっていたらどうしよう。

③こんなふうになっているのは、自分だけだ。さみしい。

また、高学年であれば、発達段階的に考えられることを踏まえて、高学年の授業プランには、差別に関するニュース番組を取り上げて、なぜそのようなことが起きているのかについても考えた。

【子ども達の感想】

・分かったことは、感染した人がいろいろなことを考えていて、はげます言葉がよく分かりました。コロナは他のウイルスの仲間ということも分かりました。

・たくさんの人たちがたくさんの気持ちを持っていることが分かりました。私に今できることは、いやな気持ちを持っている人たち優しく声を掛けたりして、相手を安心させていきたいです。100人中1人が肺炎になっていることを知って少し怖くなりました。改めて、コロナは油断してはいけないウイルスだと思いました。

・恐怖はみんなの心の中にあることが分かりました。恐怖に操られない方法が分かりました。恐怖はえさを食べるのだと思いました。

5. 実践の成果と課題

今回、学習前後で、コロナウイルスについての認識がどう変わったかを担任したクラス子ども達にワークシートと記述式のアンケートで答えてもらった。

(令和2年度-4年生) やはり学習する前後では、明らかにコロナウイルスに関する認識が深まっていることが確かめられた。

これは、感染の仕方について聞いたものだが、「少

②感染の仕方 (学習前)



②感染の仕方 (学習後)

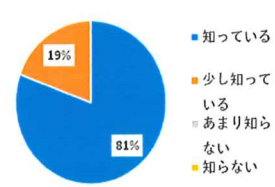


し知っている」が、学習前は39%だったのに対して、学習後は、3%になり、97%の子ども達は「知っている」となった。おそらく家族間での会話とテレビのニュース等が主な情報源と考えられるが、断片的な知識は得られていても全体としてまとまった知識を掴んでいないことを表している。この問いだけでも新型コロナウイルスについて学習する意義があることが分かる。

⑥予防の理由 (学習前)

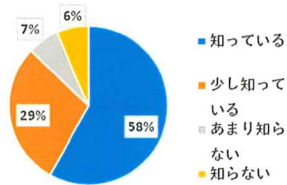


⑥予防の理由 (学習後)



次は、予防対策の理由を知っているかの質問だが、学習前「知っている」と答えた子ども達は、65%であり、学習前は3割以上の子ども達が、なぜ予防するのかの理由について掴んでいないことを表している。各学校現場で「新しい生活様式」の徹底は図られているが、なぜそれをしなければならないのかを子ども達は十分に理解していないのではないかと。しかし、学習後は、「知っている」は8割を超え、「少し知っている」と合わせると、100%となった。学習後の子ども達の予防対策の様子も理由を学んだせい、丁寧に行われているように見受けられる。これも学習の成果と言える。

⑪いじめの原因 (前)

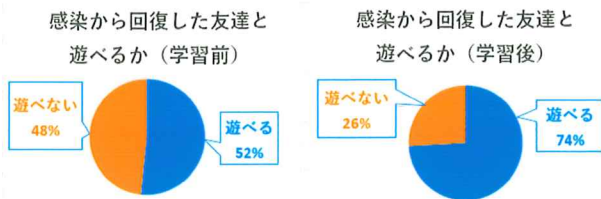


⑪いじめの原因 (後)

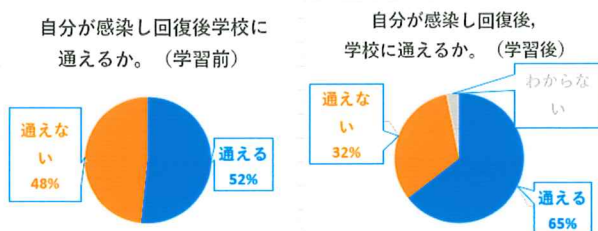


これは、コロナウイルス感染によって起こるいじめの原因について知っているかを聞いた結果で、本研究の核心に迫る問いである。「知っている」、「少し知っている」の子ども達を合わせて、学習前は65%だったのに対して、学習後には、98%になった。数値の

大きな変化は学習によってもたらされていることは明らかで、「知っている」と子ども達全員が自信を持って答えられるようにすることがいじめを生まない学級・学校づくりに必要な前提条件ではないかと考え。



上記は、記述式の「仲の良い友達が感染後2週間して治って学校に戻ってきたときに、今まで通り遊べるか」のアンケート結果である。学習前に比べて、学習後は、「遊べる」と答えた児童は2割ほど増えているが、筆者が考えるほど伸びていないのは、課題と捉える。また、興味深いのが、記述した理由であり、学習前に「遊べない」と書いた子ども達の主な理由は、感染の可能性があることへの不安だった。一方、「遊べる」と書いた子ども達の理由は多い順に、「治ったから遊べる」、「いじめになる」、「仲がいいから」という結果で、やはり新型コロナウイルスに関する科学的な知識を基に判断している様子は見られない。学習後の「遊べる」と答えた半数以上の子ども達が、理由として、「2週間で治るから」あるいは、「勉強したから」と答えていたのは、やはり学習したことが自らの行動決定の要因となっているのが分かる。これも学習の大きな成果である。



次は、「自分が感染し、回復後(2週間後)いつも通り登校できるか」のアンケート結果である。こちらも学習前に比べると、1割程度「通える」と答えた子ども達は増えている。しかし、先ほどのアンケート結果にある感染したのが友達である場合よりも増え方は鈍い。これも大きな課題であるが、リアルな今の子どもたちの想いを象徴しているようだ。学習後の理由を見ても、「通える」と答えた子ども達の理由の一番は、「皆に会いたい、皆と勉強がしたい」であり、次が、「2週間で治るから」となっている。筆者として

は、学んだことをベースに行動決定をなされることを期待して、かなり丁寧に学習を積み重ねたつもりであったが、子ども達が一番に願うのは、学校で友達と関わりながら過ごすことなのだ。また、学習後でも「通えない」と答えた子ども達の理由には、「いじめられる不安」があり、「通える」と答えた子ども達の中にも、「いじめが心配」と不安要素を抱えていることが分かった。子ども達はコロナ禍によって接触を含めた関わりを持つことを制限されながらも友達との関わりを強く望んでいる。しかし、その関わりを望む一方で、その友達に拒絶されないか、いじめられないか、大きな不安の中に置かれている構図が見えてきた。

今回、ここまで分析してきた実践の課題として挙げられるのは、大きく2つあると捉えている。

一つは、「免疫」というシステムを理解する難しさである。動画を使って視覚的に理解できるように工夫してみたが、人間の進化の賜物でもある「免疫」というシステムはとても複雑であり、一度で理解するのは高学年でも難しさがあった。しかし、一度感染して回復したらウイルスは体の中にはいないことを理解するためには、この免疫システムに対する理解がどうしても必要だ。

二つ目は、ウイルスが目に見えなく、死にもつながりうるものであることだ。そのことへの恐怖を多くの子ども達が抱いていることが今回実践してみてよく分かった。だからこそ、繰り返しその不安や恐怖に寄り添いながら、「三つの顔」を持つウイルスの怖さを心のメカニズムとして捉えて、学習を積み重ねていくことがとても重要だ。そして、一番の成果は、この実践を1クラス、1学年だけの実践に留めずにそれ以降も今年度まで、学校単位で行えている事である。これは、管理職の先生方のリーダーシップの賜物である。

6. 最後に

現在も耳慣れない新型コロナウイルスの変異株は次々生まれており、これからも制限を強いられた学校生活は続くことが予想される。しかし、学校で行える基本的な感染対策は変わらない。と同時に、コロナによるいじめが起こる危険性も続いていると捉えることが重要だ。つまり、「感染予防対策」と「科学的な知見に基づく新型コロナウイルスについての学習」は車の両輪のように今日の学校現場では、繰り返し行われるべきものと確信している。